

Title	助動詞の相互承接についての一考察
Author(s)	紙谷, 栄治
Citation	語文. 40 P.21-P.35
Issue Date	1982-11-20
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/68696
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

助動詞の相互承接についての一考察

紙 谷 栄 治

一

助動詞の相互承接については、現代語のばあいに限っても、すでに多くの論が出されている。それらについては佐伯哲夫氏(1975)にくわしく紹介されているので、ここであらためて列挙することはさけることにするが、それ以外およびそれ以後の研究・調査で、わたくしが見ることができたものには、国立国語研究所(1964)、同(1972)、西村恕彦・水谷静夫・尾上圭介・田中幸子氏(1978)、田中穂積・荻野孝野・荻野綱男氏(1980)、北原保雄氏(1981)がある。

これらの研究には、大きくわけて二つの傾向がみられるようである。一つは、相互承接の実態をできるだけ詳細にとらえようとする研究であり、その結果は相互承接図として示されることが多い。このような研究としては、橋本進吉氏(1969(254))、水谷静夫氏(1969(152))・1962(17)、樺島忠夫氏(1964(156))・1965(98)、佐伯哲夫氏(1975(82))、西村恕彦・水谷静夫・尾上圭介・田中幸子氏(1978(57))などをあげることができる。()内の数字は、相互承接図が示されている最初のページ)。

この種の研究では、助動詞の相互承接の現象を過不足なくとらえ、それを図示することが望ましいわけであるが、右のうちでは西村恕彦氏等(1978)にあげられている図が最も詳細である。助動詞の相互承接が相当複雑である以上、詳細な相互承接図が必要であることは言うまでもないが、その反面、あまりにこみいってしまつて、相互承接における中心的な部分が見失われるというおそれもないわけではない。その二つのいわば相反する要求をみたすことが一つの課題ではないかとおもわれる。

つきに、助動詞の相互承接の研究におけるもう一つの傾向は、渡辺実氏(1971)、北原保雄氏(1981)等の研究においてみられるものである。両氏は助動詞の相互承接の現象を重視され、主としてそれによってそれぞれの構文論をたてられたのである。その両氏の構文論は大きな構想をもったものであつて、高く評価されているものである。

両氏の研究においては、助動詞の相互承接の現象をとらえること自体に重点があるのではなく、それによって日本語の構文を論じることが目的となつているためであろうか、わたくしには相互承接の現象が相当抽象化されているというふうにおもわれる。現在のところ

る、助動詞の相互承接の現象がまだ完全に把握されているとはいえないがたいようであるから、それがいま一度くわしく検討されること、構文論の研究のためにも、望ましいように思われるのである。

本稿においては、以上の二つの研究の流れのうち、前者の立場から論じることとし、後者については異なった見方ができるのでないかとおもわれる点に限ってとりあげることにしたい。そして、先行の調査・研究を参照しながら、助動詞の相互承接の現象をできるだけ実態に即してとらえ、それを図示したいとおもう。

なお、ここで、助動詞の相互承接の実態をとりあつた調査について簡単にふれておくことにする。国立国語研究所1954には「文節形度数表」が、同1952には「助動詞・助詞連接表」があげられていて、助動詞・助詞の連接した形とその度数とが一覧できる。また、田中穂積・荻野孝野・荻野綱男氏(1980)は、国立国語研究所1953の資料によつたもので、同書に「助動詞・助詞連接表」としてあげられた助動詞・助詞の連接した形の実際の用例をみる事ができるものである。

二

本章では、助動詞の相互承接についての私見をのべるにすぎだつて、本稿と従来の研究との関係について、本稿の目的の範囲内のでべてみたいとおもう。なお、そのばあい、本来それぞれの論文の相互承接図を掲げたいと論じているべきであるが、スペースなどの点と、それらがしばしば引用されていることなどをかんがえて、一部を除いて省略することにした。

(i) たとえば、「らしかった」と「たらしい」のように、助動詞の

相互承接の順位が逆になるとみられるばあいがいくつもある。このようなばあいについてはつぎのようにとかれることがある。

まず、渡辺実氏1971によるとつぎのようである。

もつとも右に述べた承接順位の秩序には、重大な例外が一つだけある。第2類の助動詞は、異種同類間の相互承接はないという原則を破って、例外的に相互承接することはすでに述べたが、その際の承接順位は

あまり喜んでいないらしいので……

あまり喜んでいるらしくないので……

彼も参加したらしい。

彼も参加するらしかった。

のように、全く逆の順位をとることが可能であるという意味で、一般の相互承接における整然たる秩序に反するのである。けれども原則を破る点と言ひ、秩序を乱す点と言ひ、すべては第2類に特有の性質に起因するものであつて、決して例外と見るべきものでない。すなわち第2類の助動詞が、統叙の延長として、一旦は統叙の外ではたつきながら結局は統叙の一種であるという二重性格をもつことは前述したが、すべてはこの二重性格のせいなのである。すなわち一旦は統叙の外ではたらくという点から見れば第2類の助動詞は第3類に匹敵し、結局は統叙の一種であるという点から見れば第2類の助動詞は第1類に匹敵したが、第2類の助動詞は、はたつき方に応じて類が変わるのだとも比喩的には言えるわけだから、それらが原則を破つて異種同類間で相互承接するのも、秩序を乱して両様の承接順位をもつのも、言わば当然のことと言るのである。のみならず

このような事実は、助動詞を右のような1・2・3類に大別し、第2類の助動詞に右のような中間的二重性格があると認めることによって、始めて十分に解釈できる事実であって、実は助動詞の相互承接における原則と秩序とを裏から支える事実にはならない。したがって助動詞を二種三類に分類することと、日本語の文の成立事情を統叙から陳述への次第送りの連続的過程に見ようとすることは、ともにこの事実によって二つながら支持されると言つてよいかと思う。(137-138ページ)

(注) 氏によると甲種・乙種、第1類〜第3類とはつぎのとおりである。(115・133ページ)

甲種 直接に体言に下接する助動詞

乙種 直接に用言に下接する助動詞

第1類 単純な意味で統叙の一種としてはたらく。

第2類 一旦は統叙の外ではたらしながら、結局は統叙の一種にすぎず、このような二重性格があるという意味で統叙の延長としてはたらく。

第3類 終助詞に準じて、陳述の一種としてはたらく。

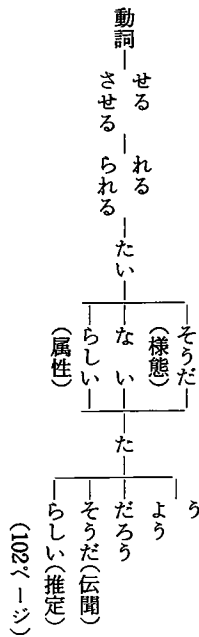
氏はこのように第2類の助動詞「らしい」「ない」「た」は相互承接の「秩序に反する」とされたのであるが、それ以外に解釈できないだろうか。

また、北原保雄氏(198)は、助動詞の相互承接を下段のように図示された。

そして「そうだ」「ない」「らしい」相互の関係については、
あまり喜んでいないらしいので……

あまり喜んでいくらしいので……

(この三者は相互に順序が入れかわる)



行かないそうだ。
行きそうでない。

のような例文をあげられたうえで、

すなわち、主格展叙成分と直接関係するような述語、つまり主格統叙成分を構成するという点で構文的職能が同一であるが故に、「ない」は「そうだ」「らしい」に上位もし下位もしうるのだと解釈される。(101ページ)

とされた。また、「そうだ」「らしい」と「た」との承接の順序については、

これは、順序不同と見るのではなく、「た」を不動のものとして定位置し、「そうだ」「らしい」が「た」に上位もし下位もするというように見た方が、事実に近く、また考察にも都合のようである。(109ページ)

とされたうえで、「そうだ」「らしい」が「た」に上位するばあいには「様態」「属性」をあらわし、「主格展叙の成分と直接関係している」とし、「そうだ」「らしい」が「た」に下位するばあいは「伝聞」「推定」をあらわし、「超格の成分と関係する」とされた。氏の説かれる

所には興味深いものがあるが、相互承接の点からいえば、たとえば、

(1) 十時にはつきそうだった。(様態)

(2) 十時にはつくそうだった。(伝聞)

では、「様態」「伝聞」の「そうだ」は共に過去形をとり、また、

(3) 十時にはついたそうだった。

(4) 十時にはついたそうだった。

のように、「た」に下位する「そうだ」はさらに過去形をとることができるのであるから、「た」に上位する「そうだ」は「様態」をあらわし、「た」に下位する「そうだ」は「伝聞」をあらわすことには無理があるように思われる。「らしい」のばあいにも、

平吉も電灯をつけたらしかった。(曾野綾子『ぜったい多数』)

のような例があり、同じことがいえる。このように伝聞推量の助動詞にも「た」が下接するが、これは氏の構文論によれば、超格の上にさらにもう一つの時格がくることになりはしないであろうか。

このように、渡辺実氏・北原保雄氏は相互承接の順序が逆転することについてのそれぞれの解釈を示されたのであるが、わたくしはそのように解釈するよりもむしろ「ない」「た」は本来単文または従属節中においても複数回用いられることができるかとみる方がよいのではないかとおもう。現に、北原保雄氏の引用文中にあげられている例文にして、

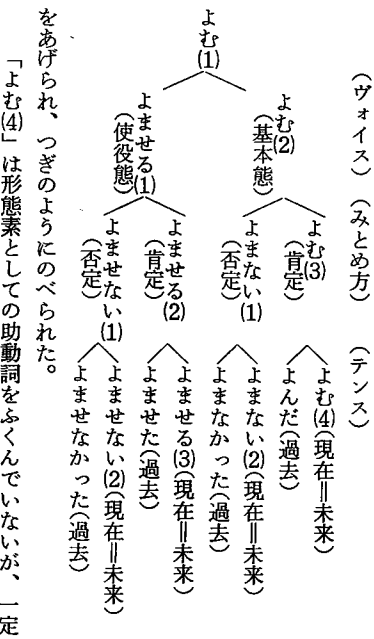
- (5) 喜んでいないらしくは ないので……
喜んでいらしくないので……
どこかへ出かけたらしいので……
どこかへ出かけるらしいので……

(7) どこかへ出かけたらしかったので……
どこかへ出かけるらしかったので……

のような組にしてくると、「ない」「た」は本来単文、従属節中においても複数回用いられることができ、また用いられる位置によって、異なった意味をあらわすことになるとかんがえる方がよいのではないかとおもう(詳細は稿をあらためてのべたい)。

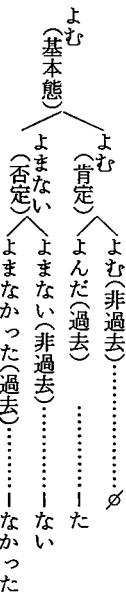
この点については、樺島忠夫氏(1964・1966)、西村恕彦氏等(1978)では「た」「ない」が入りうる位置には複数回それらがおかれているが従うべきであろう。そこで、本稿の相互承接図では「ない」「た」が位置することが可能な個所にはすべてそれをあげることにした。

つぎにそれではなぜ「ない」「た」が一文中で複数回用いられるかについて考えなければならぬが、それについては、鈴木重幸氏が、たとえば同氏(6)において説かれていることがおもしろいとおこされる。氏はつぎのような「動詞の形態論的構造」をあらわす表



のヴォイス・みとめ方・テンスをもっている。そして、「よむ(4)」におけるそうしたカテゴリーの種類と、それらのあいだの相互関係は、「よむ(4)」の下にならんでいる他の形とまったくおなじだ。(16ページ)

氏の引用文中にあげられた三つのカテゴリーのうち、「ヴォイス」は動詞に限られるが、「みとめ方」「テンス」のカテゴリーは、形容詞や助動詞(「う」「まい」など活用しない)部分のものを除く)も共通にもっているものである。つまり、動詞・形容詞およびそれに「せる」「れる」「たい」などが下接したものは、「みとめ方」と「テンス」のカテゴリーをもつが、それに「らしい」「そうだ」などの助動詞が下接すれば、それらもまた同じ二つのカテゴリーをもつわけである。そこで、この点に注目して、本稿の相互承接図では、動詞・形容詞・助動詞についてはその二つのカテゴリー、すなわち「みとめ方」のカテゴリーでは肯定形と否定形、「テンス」のカテゴリーでは過去形と非過去形(氏の「現在||未来」を本稿では「非過去」とする)の形(つぎの表の最下欄)であげることにした。



なお、鈴木重幸氏1975には北原保雄氏1981のもとになった同氏ら20に対する批判がのせられている。わたくしもし鈴木重幸氏のとかれるところにしたがいたいとおもう。

(iii) 助動詞の相互承接をかんがえるばあいには、助動詞をどの範囲までみとめるかが問題になる。これまでの研究をみると、国立国語

研究所1966では「ようだ」「そうだ」(様態・伝聞とも)は「体言+助動詞」とみなされたために除かれており、渡辺実氏1971では「そうだ」はとりあげられているものの、「伝聞」をあらわすばあいは除かれており、「ようだ」も除かれている。北原保雄氏1981においても渡辺実氏とはほぼ同じであるが、渡辺実氏にある「まい」が除かれている。その他、国立国語研究所1966では「(さ)せる」「(ら)れる」「たい」なども接尾語として除かれているというようなことがある。

このように一部の助動詞が、その起源または理論上の理由から除かれることがあるが、その当否は別として、実際にはそれらは動詞・形容詞などにすぐ下接する位置から、最も文末に近い位置にいたるまでの助動詞の連結のどこかに位置しているのであるから、助動詞の相互承接の問題をかんがえるばあいはやはり取りあげるのがよいようにおもわれる。もし取り上げないとすれば、それにかわって、それらの助動詞・形式名詞・接尾語をひっくるめた承接というものを考えなければならぬとおもう。そこで本稿では助動詞をひろくかんがえ、通常助動詞とされているものとはとりあげることにした。

また助動詞の相互承接中に入る助詞については、「のだ」の形で用いられる「の」、係助詞「は」「が」が不自然なばあいは「も」、疑問をあらわす終助詞「か」をとりあげることにした。

(iv) 助動詞の相互承接を明示するにあたっては、ありうるとかんがえられる連結はすべてあげることにした。そのような助動詞の連結が可能か否かの判断は、主としてわたくしの内省によることにした。

また、国立国語研究所1966の「文節形度数表」国立国語研究所1962の「助動詞・助詞連接表」などの従来の研究をも参照したが、そ

こにあげられている助動詞等の連結は概して短く、複雑なものはい。その理由としては、それらの調査の対象となっている新聞・雑誌においては、あまり複雑な述語が好まれないこと、また相互承接を複雑にしている推量関係の助動詞がなじまないことなどがかんがえられる。むしろ相互承接の複雑なものは日常の会話に多いようにも思われるのであるが、その実態については調査できていない。

このように、助動詞の連結のなかには、実際にはつかわれるようでありながら、実例を見出すことが容易でないものが多い。そこで、本稿では、実例だけによらず、内省によってありうるとおもわれる連結のすべてをあげることにした。できるだけ多くの可能な連結をかんがえたうえで、その実例がなぜ見出されない(見出されにくい)かについて、あらためて考察すべきだとかんがえたからである(単に、そのような連結に相当する状況が書かれていないだけだということも一応かんがえに入れるべきであろう)。

以上のような点を考慮して助動詞の相互承接を図示したのが第一図である。次章ではその概略を説明することにするが、その前に、図の表示のしかたについてふれておきたいとおもう。

(i) 第一図では助動詞の前後に「 」をつけるばあいがあるがそれはつぎのとおりである。

「 」のように助動詞の前に「 」をつけたものは、つねに「 」後につけた動詞・形容詞・助動詞の特定の活用形と結合するものである。それに対して、「 」のように後に「 」をつけたものは、「 」のような前に「 」をつけたものと結合することが必要であり、単独では述語になることができないものである。したがって、「 」(「 」)のようにあらわしたものは、「 」で終る動詞等

からつづき、述語にはならずさらに「 」ではじまる助動詞へつづいていくものということになる。

一方、「 」のように、後に「 」がないものは、それ自体が鈴木重幸氏の「みとめ方」「テンス」のカテゴリーをもち、単独で述語になることができるものである。

また、前に「 」のついていない助動詞、たとえば「ようだ」「そうだ(伝聞)」「らしい」などは、「みとめ方」「テンス」のカテゴリーをもって、述語になることのできる形をうけることをあらわす。

(ii) 「 」は、そのうちの一つの形がえらばれることをあらわす。

(iii) 助動詞は、それに上接する動詞・形容詞・名詞等から、助詞「か」にいたるまでの間に配列し、それらがどのように連結するかを実線で結んで示した。助動詞が連結するばあいは、必ず左から右への方向をとるものとしたので、左右の実線には矢印を省略した。なお上下の線については原則として矢印をつけた。

ただし、実線でむすぶことにより図があまりに複雑になるおそれのあるばあいは、点線・破線またはA・Bなどとして、それらがどこにつづいていくかをあらわした。

三

本章では、28ページにあげる第一図について、その概略をみていくことにする。第一図では左(動詞・形容詞・名詞等)から右(文末)にかけて仮に1-7のようにわけた。以下その順にしたがってみていくことにするが、その前に、表についての注をあげておく。

(注) 1 「A」は「(楽し)」かるべき、かりそう、かるう」およびE「 」につづくばあいに限られる。

「らしい」「らしく」は接尾辞である。

「そう」は様態をあらわす。なお、この「そう」のあの「で」は、それが「ない、なかった」の前にくるばあには、「だ」となることができる。

1~6の「ない」「なかった」の部分は、



におきかえることができる。

2 ヌは「らしい」「なら」につづくときにかぎられる。

3・5 「そう」は伝聞をあらわす。また伝聞の「そう」は

Fにはつづかない(たとえば「くるそうではなさそうだ」)。

7 「です」「でした」は動詞の肯定非た形、判断辞である「および」「ます」にはつかない。

つづいて1~7についてその概略をみることにする。

1 この段階では、動詞(「さ」せる)「ら」れるの加わったものをふくむ(・形容詞が、「ない」「た」をともなつて、「」内にあげたような、肯定と否定・過去と非過去の対立をあらわし、また、動詞・形容詞に「たい」のついたもの全体がやはり肯定と否定、過去と非過去の対立をあらわしている。一方、名詞・形容動詞語幹・「べき」・様態をあらわす「そう」は判断辞「だ」「である」「でない」をとるごとによつて、肯定と否定、過去と非過去の対立をあらわすことになる。

このようにみると、1は動詞・形容詞またはそれに「たい」が加わったもの、および名詞・形容動词语幹・「べき」「そう」など

に判断辞が加わったものが「みとめ方」と「テンス」の二つのカテゴリーをもち、それによつて述語となることが可能になる段階ということができる。

2・6 2から6にかけては便宜的に処理した点が多い。まず、2と6とであるが、この二か所にはどちらも「のだ」をおいた。その理由はあとにまわすことにして、紙谷栄治(1955)にもつづいて、「のだ」の概略をみておきたいとおもう。

「のだ」(疑問のばあいは「のか」は、「の」と「だ」(「か」からなりたっているが、そのうちの「の」はことがらを一つの命題の形であらわすものであり、「だ」(「か」)はその命題を肯定するか、その命題が成り立つことに疑問があるかをあらわすものということが出来る。それではなぜこのような「の」を用いた断定あるいは疑問の表現が用いられるかという、それには二つの理由がかんがえられる。①一つは命題の形であらわされる部分が何らかの根拠あるいは他者の発話などにもつづくばあいであって、それに対して話者が断定・疑問をあらわすか、あるいは相手に判断を求めようならばあである。たとえば、

(8) a やればできますよ。
 b (ごらんさい。)やればできるのですよ。

では、bは、「やればできる」ということがすでに確かめられている(たとえば、本人が成功したことをさしての発話のばあい)か、そのことが他の例などから客観的にみとめられるばあいにつかわれる表現である。また、

(9) a その方がより簡単ですか。
 b その方がより簡単なのですか。

では、bは、相手が「その方がより簡単」である旨をすでに明らかにしているばあいにはそのことについての当否を、あるいは話し手が何らかの根拠にもとづいて「より簡単」であるとみなすばあいにはその判断についての当否をそれぞれたずねる疑問表現である。そのばあい、「のだ」「のか」の形をとらないでも、それぞれの例文のaのように、話者が直接断定または疑問をあらわす表現をとることも可能である。

② それに対して、もう一つは「のだ」をとることが構文上必要なばあいである。たとえば、

(10) 彼は自分のためにこの本を買ったのではなくて、子供のために買ったのだ。

では、「のではなく」と否定されているのはその前の「自分のために」であり、「のだ」と断定されているのはその前の「子供のために」である。このように「の」を介することによって、断定・否定の対象が、断定・否定の形式が下接する直前の動詞に限られるものではないことをあらわしているのである。では、このようなばあい「の」がなぜ必要かといえは、日本語においては、断定・疑問・推量・否定・接続等をあらわす形式は文末または従属節末におかれるため、「の」を介する形をとらなければあいに、断定・疑問等の対象は直前の動詞等に限られてしまい、文のそれ以外の部分または全部におよばないという事情があるからである。そこでそれらの部分を断定・疑問等の対象とする必要があるばあいに、「の」を介する形をとることが必要になるとかんがえられる。したがってこのばあいに、「のだ」をとりうることはできないわけである。

それではつきになぜ2・6にこのような「のだ」をおいたかであ

るが、それにはつきのような理由があげられる。

(i) たとえば、「のだ」(②)をつかった例文

(11) 彼は子供のためにこの本を買ったのだ。

では、「子供のために」の部分に「彼」が「この本を買った」ことの理由として強調されているとみることができ。このばあい「のだ」は1の部分、つまり「みとめ方」と「テンス」のカテゴリーをもち、述語としての性質をそなえたものの下接していることになる。ところで、例文(11)の点線の部分を推量するばあには、

(12) 彼は子供のためにこの本を買ったのだ(のだった)のである。
らしい
ようだ
そうだ

のようにすることができ。このばあい「のだ」は1に下接し、推量をあらわす「らしい」「ようだ」「そうだ」に上接することになる。ところで例文(12)を、

(13) 彼は子供のためにこの本を買った
らしい
ような
そうな
のだ。

とくらべてみると、例文(13)のばあい、「のだ」(①)は1に下接した「らしい」「ようだ」「そうだ」にさらに下接するということになる。つまり、「のだ」には、推量の助動詞に上接するばあいと下接するばあいとがあることになるわけである。

(iii) たとえば、

(14) 彼女は、弟にあげるためにおみやげを買った

のだった
のではなかった
の(ん)だよ。

のような例文は、彼女がおみやげをかったという事実を前提とした文であるが、そのなかの「のだった」「」ではなかった」は点線の部分「弟にあげるために」に対する肯定および否定の判断をあらわす必要から用いられたものである(②)。ところが文末の「の(ん)だ(よ)」は、「の」を用いることによって、話者が自分の主張しようとすることがらを一つの命題の形であらわし、聞き手に対してある種の強調(このばあいには、相手を納得させるなど)をあらわすために用いられている(①)。このように例文(14)では、さきにのべた「のだ」の二種の用法がみられるわけであるが、この二種の「のだ」の承接の順は逆転することはない。

また、例文(14)では②(①)の「のだ」がつづいてでてくるが、その間にはつぎのように助動詞が入ることができる。

(15) 彼女は、弟にあげるためにおみやげをかった

のだったらしい
 のだったらしい
 のではなかったらしい
 のではなかったらしい
 のではなかったらしい
 のではなかったらしい
 の(ん)だよ。

そのほかにも「のだそうだ」「らしいよなのだ」「らしいよなのだ」などの形が可能であろう。

なお、例文(10)のうちの「らしい」のばあいは、

……かったのらしい。

のように、「のらしい」とすることができ、国立国語研究所1961年にはつぎのような例文があげられている。

松本くんは、おとうさんの用たしで、章吉のおとうさんのところへ来たのらしい。(279ページ)

以上にあげた(i)(ii)の理由から、この二つの「のだ」には、

のだ(②)——推量の助動詞——のだ(①)

のような順序があるとかんがえることができる。そこで、前の「のだ」は2とし、後の「のだ」は、推量の助動詞に3・4・5をあてる(後述)ため、6とすることにす。

なお、第一図にはあらわすことができなかったが、3および5の伝聞をあらわす「そうだ」の前には、「のだ」(①)がくることができる。それは、伝聞をあらわす「そうだ」には、「そうだ」に上接する伝聞の内容をあらわす部分を明示しようとする力がはたらく、本来そのような性質をそなえた「のだ」を、相互承接の点で複雑になるにもかかわらず、その前にとるためだとかんがえられる。つきに例をあげておく。

(16) 彼女は、弟にあげるためにおみやげをかったではなかったのだそうだ。

(17) 彼がくるようだったのだそうだ。

彼がくるようだったのだそうだ。

(18) 彼がくるらしいのだそうだ。

彼がくるらしいのだ。

なお、1の注でGとして「なくはないなかった」「ない(の)ではない(ななかった)」をあげた。それは、ともに結局は肯定の表現であるが、それぞれには、たとえば、

(19) 非常に小きな生物だが、よく動くから、肉眼でも

みえなくはない。
みえなくはない。
みえなくはない。
 のだ。

のように点線部を強調する「のだ」がつくことができ、「みえるの

だ」の意をあらわす。もし例文(例を「みえない一のではないのだ」のように区切ると、その生物がみえないことになって、こととなった意味をあらわすことになる。

なお、1の「ない」の位置におかれたGに2と6の「のだ」が加わると「のだ」は三回あらわせることになる。

(20) 彼は彼女に対して冷淡にみえたが、それでも彼女のことを心で心配していたからこそ、彼女の将来をかんがえてやらないでもないのだったの(ん)だ。

3と5 2と6の「のだ」の間には「ようだ」「そうだ(伝聞)」「らしい」がくることになるが、その承接については複雑である。

まず、その三者について、相互に承接する例があるかどうかとも問題であるが、たとえば井上和子氏1976には

君の友達がやって来たらしいそうだよ。(24ページ)

のような例があげられている。このように上記三者が相互に承接する例は内省によればありうるとおもわれるのであるが、実例をさがすことは容易ではないようである。たとえば、国立国語研究所(1992)のような多数の用例をあげたものにも、同1972の「助動詞・助詞連接表」にもあがっていない。それらは資料が新聞・雑誌であるということによってそのような結果になったともかんがえられるのであって、むしろ日常の会話などでつかわれることが多いようにもおもわれるのであるが、いずれにせよその実態についてはあきらかではないようである。本稿においても、その実態の調査の必要を痛感しながらも実施するまでにはいたっていないので、とりあえずわたくしの内省による例文を用いることにする。

まず、例文とその解釈をしめすことにする。

(21) 彼がくるらしいようだ。(1)その場の様子などからみて、または伝え聞いたことにもとづいて)話し手が彼がくると推測するばあい。(2)他者が彼がくるらしいと推測しているものと、話し手が推測するばあい。)

(22) 彼がくるらしいそうだ。(1)伝え聞いたことにもとづいて、話し手が、彼がくると推測するばあい。(2)彼がくるらしいという他者の推測を話し手が伝え聞いたものとしてあらわすばあい。このような「らしいようだ」「らしいそうだ」は、それほど不自然な連結とはいえないように思われる。

一方、逆の順序の「ようであるらしい」「そうであるらしい」「そうである」は伝聞)については、前者は

(23) その時の空の色は、まるで墨を流したようだったらしい。のような「比況」をあらわすばあいは別としても、

(24) 彼はどうも 行きたい 行きたくない ようだったらしい。(1)彼が行きたい(行きたくない)

たい(行きたくない)ようであったと発話時点において話し手が推測するばあい。(2)他者が彼が行きたい(行きたくない)と推測しているものと、話し手が推測するばあい。)

のように可能な連結であるとみることができ、後者は、
(25) 彼のことについて彼女が人から聞いたところによると、どうも彼はそれほど幸福でもないそうだったらしい。(彼女が彼はそれほど幸福ではないと伝え聞いたものと、話者が推測するばあい)

(26) 彼女が来客の準備をしていたのは、彼がくるそうであったらしい。「彼がくる」ということを彼女が伝え聞いていたものと、

話者が推測するばあい」

のような例文は考えられないことはないものの、やはりまれな連結
ということになるかとおもう。

以上のような例文と解釈がなりたつとすれば、「ようだ」「そうだ」
と「らしい」の相互承接は、

ようだ ようだ

(そうだ) —らしい— そうだ

のように図示することができるかとおもう。第一図では、順に3・
4・5に配当した。ただ、「ようだ」「そうだ」が単独であられる
ばあいは問題であるが、活用形を図示する必要から、仮に5とした。
なおここで1にあげた様態をあらわす「そうだ」についてふれて
おくと、「そうだ」は

⑦ いまにも雨がふりだしそうだった ようです
そうです(伝聞)
らしい

のように、「ようだ」「そうだ」(伝聞)「および」「らしい」「らしい」
につづくときは「そうらしい」の形をとることもできる(につづく
ことができるが、逆に「ようだ」「らしい」から様態の「そうだ」
につづくことは、つぎのようにそれぞれの否定形からつづくばあいを
除いてはないようである。

⑧ 雨がふる ようで
らしく はなきそうだ。

そして「内」に「そうだ」(伝聞)「がくることはないようである。ま
た例文⑧のように「そうだ(様態)」は「ない」につづくことができ
るので、つぎのように「そうだ(様態)」が二回用いられることもあ

りうる。

⑨ 雨は当分りそうでもなきそうだ。

以上、「らしい」「ようだ」「そうだ」相互の承接についてひと
おりみてきたのであるが、詳しい調査が必要であると思われるので、
その結果をまとめてあらためて論じることにした。

6 6には「のだ」をおいたが、これは2にのべたとおりである。
それとともに、重複をさげるために、5の判断辞の一部をも便宜上
ここにあげた。

また6では「ーです」「ーでした」の形をあげたがそれはつぎの
ような理由による。形容詞および「書か)ない」「らしい」は、そ
れ自体、たとえば「高かった」「書か)なかった」「らしかった」
のように過去形をもっているが、一方ではそれ自体ではテンスをあ
らわさず、「です」を用いた「高いでした」「書か)ないでした」「ら
しいでした」の形でテンスをあらわすことがある。しかも、その形
は、「高いでしたしょう(か)」「書か)ないでしたしょう(か)」「
らしかったですしょう(か)」のように、さらに「でしたしょう(か)」「
つけられることができる。そこでそれ自体テンスをあらわさない形容
詞および「ない」「らしい」(それらは「ない」「らしい」とす
べきであるが、スペースの関係で↓Eとしてそのことをあらわし
た)につづいてテンスをあらわす「ーです」「ーでした」をあげた
わけである。そこでテンスをあらわしたものをうける「です」は7
に、テンスをあらわさないものをうける「です」は6に属するもの
とした。

なお「ーです」「ーでした」は形容詞・「ない」・「らしい」のほか
に、名詞および「よう」・二種類の「そう」・「べき」および「のだ」

の「の」に対する敬意を含んだ判断辞でもあるわけであるが、両者をあわせてかんがえてもさしつかえないとおもわれるから、二つをあわせて図示した。

7 7には推量・疑問・仮定をあらわす形をあげた。

なお、7にあげた「だろう」は、たとえば、

(30) 彼はきただろうか。

(31) 彼はそのためにきたのだっただろうか。

(32) 彼はくるらしかっただろうか。

のように、1〜6の「みとめ方」と「テンス」をかねそなえ、述語としての性質をそなえたものをうけるのであるから、名詞・形容動詞語幹および「の」「よう」「そう」などにつづく「だろう」とは區別した。後者は判断辞の「だろ」と助動詞「う」とからなるものとみて、第一図では↓Bのようにあらわした。このあつかいは、金田一春彦氏(1933)に、

動詞・形容詞につく「だろう」に関する限り、たしかに一箇の助動詞と見てよいと思われる(23ページ)

名詞につく「だろう」は「だ」の意味を含んでいるゆえ、「だろ」「う」という二箇の助動詞の結合と見る。動詞・形容詞につく「だろう」は文語の「らん」に相当し、名詞につく「だろう」は文語の「ならん」に相当する。(23ページ注)

ここで、第一図の説明をおさえるにあたって、第一図にもどづいてやや長い助動詞の連結をもった例文をあげておくことにする。

(33) いろいろの人の話をきいてみると、どうも彼女は幼い弟たちの世話をするためにやってくるのではないらしい(そうなの(ん))

だ。

(34) 彼の話を書いてみると、彼がこまっているとき、みんなが彼をたすけてやったようでもなかったらしいのだ。

四

前章では、第一図についてその概略をのべたのであるが、それによつてつぎのようなことがいえるかとおもう。

(i) ふつう助動詞とされているものの中には、①動詞・形容詞または他の助動詞の特定の活用形と結合するもの(第一図では、前に「をつけた」と、②動詞・形容詞または他の助動詞の肯定・否定と過去・非過去の対立をあらわす形(述語としての性質をそなえているもの)につづくものとの二種類にわけることができる。後者は2〜7にわたっている。

(ii) 第一図でみると、2・6が重複し、4の「らしい」と3・5の「ようだ」「そうだ(伝聞)」とのあいだで助動詞の承接の順序が逆転している。これは1にあげた助動詞にはみられなかったことで、述語としての性質をそなえたものにつく2〜6の助動詞の特色ということができる。

(iii) 第一図の1〜6においては、若干の例外をのぞいて、それぞれが肯定・否定と過去・非過去とをあらわして(鈴木重幸氏の「みとめ方」と「テンス」のカテゴリーをもって)述語としての性質をそなえており、それらが一定の順序でいわば重層的にかさなっていることとみることができる。

このことは、「ない」「た」が一文中に複数回用いられることを示すものとみることができ、北原氏のように、かかりの部分(た

たとえば時をあらわす修飾語」とそれをうける部分（たとえば「た」とが一对一に対応するとみることに検討の余地があるだろう。この問題については別の機会にあらためて論じたいとおもう。

(iv) 2-6は、それぞれのいわゆる助動詞の活用しない部分および「の」と活用する部分とに分けることができる。後者は助動詞を構成する判断辞とみることができ。そうすると7は判断辞だけからなっていることになるが、それは6以前の部分について判断をくだすという特異なものであるとかがえることができる。

以上のように、助動詞の相互承接の現象をみてきたのであるが、便宜的な処理をしたところなどいろいろ問題が残る。また本稿では一応ありうるとかがえられる連結はあげるといふ方針をとったが、実際にはあまり用いられないものがあることは事実であるから、つぎにそれではなぜ用いられないのかについて考えなければならぬわけである。また助動詞の相互承接と構文の関係についても、本稿のかがえ方ではどうなるか、など検討すべき点が多いが、すべて今後の課題としたい。

引用文献

- 井上和子1976 『変形文法と日本語 (一)』大修館書店
樺島忠夫1964 『表現論』綜芸舎
1965 『語順の理論と実際』(「口語文法講座」2) 明治書院
紙谷栄治1981 「のだ」について (「京都府立大学学術報告 人文」第33号)

北原保雄1970 「助動詞の相互承接についての構文論的考察」(「国語学」第83集)

1981 『日本語助動詞の研究』大修館書店

金田一春彦1953 「不変化助動詞の本質」(「国語国文」第22巻2・3号)

(「論集日本語研究」7有精堂 によった)

国立国語研究所1951 『現代語の助動詞』

1964 『現代雑誌九十種の用語用字』第三分冊

1972 『電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅲ)』以上秀英出版

佐伯哲夫1975 『現代日本語の語順』笠間書院

鈴木重幸1975 『構文論における形態素主義について』(「横浜国大人文紀要」II-22)

田中穂積・荻野孝野・荻野綱男1980 『新編日本語品詞列集成右順篇(上・下)・左順篇(上・下)・解説篇』電子技術総合研究所

西村恕彦・水谷静夫・尾上圭介・田中幸子1982 『日本語基本文法単文篇』(「電子技術総合研究所研究報告」第28号)電子技術総合研究所

所

橋本進吉1969 『助動詞の研究』岩波書店

水谷静夫1959 「語の受け継ぎの仕組みに関する一研究法」(「ことばの研究」秀英出版)

1962 『言語研究への行列の応用』(「計量国語学」19/20)

渡辺 実1971 『国語構文論』塙書房

本稿でとりあげた問題に関する文献については、金井明・佐竹秀雄・中野洋氏にご教示いただいた。また例文については神田真理子氏にご検討いただいた。ここにお礼を申しあげる次第である。